



令和3年1月

スクールカウンセラー 中野隆治

「自分の年」



みなさん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、みなさんは、昨年的一年、たとえ、世間的に大変な一年であったとしても、これで良かったとも思える一年だったでしょうか。たとえば、みなさんと同じ年頃のフランスの天才詩人のように、満ち足りた経験をしたでしょうか。彼は言っています。

やっと見つけた。

何が？

永遠が。

海に溶け込む太陽が。

(アルチュール・ランボー「永遠」)

永遠を見つけたランボーは、親友ポール・ヴェルレーヌ(「秋の日の ヴィオロンの ためいきの ひたぶるに 身にしみて かな 悲し一秋の歌」の詩人)と別れ、一人、アフリカの武器商人となって旅立っていきます。その後、彼は詩的生活とは全く関係のない武器商人として、片足を失って故郷フランスに戻ってくるまで、別の人格として暮らしました。ただ、20歳頃までの彼の残した詩編は、詩人としての世界的な業績として、「永遠」に残って行くはずです。

ひるがえって、みなさんはどうでしょうか。この一年、「これが永遠だ！」と思えるものを見つけたでしょうか。きっと、まだまだ旅の途中だと思っている人が、多くいるのではないのでしょうか。みなさんの今の状態のことを、心理学では「モラトリアム」と言います。日本語に訳せば、「猶予期間」とも言うのでしょうか。ちょっと難しく言えば、「何者にでもなり得るために、何者でもない生き方をする期間」とも言えるかもしれません。

この一年間、みなさんのほとんどは、モラトリアムの期間を過ごしてきたはずですが、今年はどうでしょうか。そろそろ、自分が何者か、本当の自分を探り当てる期間が来ているかもしれません。確かな学業や、スポーツなどに裏打ちされた、誰のものでもない自分だけの高校生活を送る時期が来ているのではないのでしょうか。

何のために机に向かい、何のためにボールを蹴るのかという問いへの答を、自分自身の生きるテーマとして考える一年が来ているような気がします。コロナ禍をはじめ、どんな制約があったとしても、一つのターニングポイントかもしれません。

海に溶け込む太陽のように、これだという何かをこの一年で発見してほしいと思います。これまでの自分を乗り越え、浮ついた日常生活に流されない自分……そんな自分を生きたという実感は、心地よくみなさんの記憶に残るはずですよ。

自分に与えられた、自分だけのものである一年、そんな一年を過ごしてくれることを期待しています。